はじめに

はじめて高校野球の全国大会が行われたのは1915年、もう100年以上も前のことです(当時の名称は全国中等学校優勝野球大会)。第二次世界大戦の影響などで中止になった年もありましたが、「夏の甲子園」として、野球ファンだけでなく、多くの日本人に愛されています。

どうして高校野球が、とくに夏の甲子園が日本人の心を揺さぶるのでしょうか。それは、そこに敗者がいるからです。

全力を尽くしながら敗れた球児の涙は何よりも美しく見えます。肩を抱きあいながら互いの健闘を称える姿は青春を思い出させてくれます。

戦っている選手にとって、最後の夏の甲子園に敗れることは、おおげさにいえば、ひとつの死のようなもの。どんな選手にも5回のチャンスは与えられますが、18歳の夏が終わればもうそこに参加することができなくなります。弱小野球部の一員だった私も、最後の

夏が終わった瞬間に絶望感と喪失感を覚えたものです。

野球が好きな少年で、甲子園に出たいと思わない人はいないでしょう。すべてをなげうってでもそこは目指すべき価値のある特別な場所です。だから、15歳で親元を離れ、縁もゆかりもない土地に飛び込む選手がたくさんいるのです。

野球の強豪校と言われるチームには、野球のうまい選手がたくさんいて、激しい競争があります。それに加えて、厳しい上下関係も待っています。同じチームのライバルの実力を目の当たりにして、自身の力のなさを痛感することもあるでしょう。激しい練習によってケガをすることもあるし、ミスをして落ち込んだり、叱責に耐えられず心が折れたりすることも珍しくない。運よくレギュラーを獲得しても、他校の壁に跳ね返されることもあります。

夏の甲子園に出場できるのは、都道府県の予選を勝ち抜いた49校だけ。硬式野球部のある学校は全国に４０００校以上ありますから、確率にすれば1％強。ほとんどの野球部員が甲子園の土を踏むことなく、ユニフォームを脱ぐことになります。

運よく予選を勝ち抜いて甲子園に出場した選手たちを待っているのもまた敗北です。出

場49校のうち、頂点に立てるのはわずか1校だけ。ほかの48校の選手たちは涙を流しながら甲子園の土をかき集め、聖地から去ります。

甲子園はたったひとつの勝者を決める大会ですが、この大会を彩ってきたのは数え切れないほどの敗者たちです。甲子園に残る伝説を振り返れば、そのことがわかります。

1979年8月、春夏連覇を目指した箕島（和歌山）の前に立ちはだかったのは星稜（石川）でした。延長18回まで続いた3回戦は、箕島のサヨナラ勝ちで幕を閉じました。この試合が「高校野球史上最高の試合」と称されるのにはいろいろな理由があります。

1点をリードされた後攻の箕島が延長12回と16回に、二死ランナーなしから二度ともホームランで追いついたこと。16回のホームランが飛び出す前に星稜の一塁手がファウルフライを捕り損ねたこと、14回裏のサヨナラ負けのピンチの場面で星稜の三塁手が隠し球で走者をアウトにしたこと。そして、最後の最後まで、両校の投手が投げ切ったこと。

激戦を制した箕島がその後も勝ち上がり、史上3校目の春夏連覇という偉業を達成しましたが、敗者となった星稜の選手たちは王者に劣らないほど称賛され、両校の戦いはいまだに語り草になっています。

１９８０年夏、背番号11を背負ってさっそうとデビューした荒木大輔（あらき だいすけ）さん（早稲田実業・東京）は、甲子園に新しい風を吹き込みました。「大ちゃんフィーバー」と呼ばれるほどの人気で、甲子園に女性ファンが集まるようになったのはこの夏からだと言われています。

当時中学生だった私も荒木さんのピッチングに魅せられたひとりでした。他校のいかつい三年生を涼しい顔で次々に打ち取っていきます。派手なガッツポーズもなく、クールに黙々と。高校一年の夏に決勝で横浜（神奈川）に敗れた荒木さんはその後出場できるすべての大会で予選を勝ち抜き、甲子園の土を踏みました。しかし、いつも優勝候補に挙げられながら、頂点に立つことはできませんでした。５回も甲子園に出場しながら、５回とも敗戦投手になった荒木さんもまた歴史に名を刻んだ「甲子園の敗者」です。

その後、桑田真澄さんと清原和博さんのＫＫコンビの活躍で優勝を飾ったＰＬ学園（大阪）、奇跡のバックホームで熊本工業（熊本）に勝利した松山商業（愛媛）、激戦となったＰＬ学園戦、明徳義塾（高知）戦を「怪物」松坂大輔（まつざかだいすけ）投手の快投で制した横浜、延長再試合の末に駒大苫小牧（北海道）を下した斎藤佑樹（さいとうゆうき）投手率いる早稲田実業……。勝者の輝きはどれだけ時間が経ってもあせることはありません。しかし、彼らの陰にはいつも敗者がいまし

た。「甲子園の敗者」こそが主役だと私は思います。

甲子園で涙を流した選手たちはその後、どんな人生を送ったのか。敗北から何を学び、どんな道をたどっていったのでしょうか。本書では8人の「甲子園の敗者」に登場してもらいます。

第1章は、2016年夏の決勝で作新学院(栃木)に敗れたものの、さわやかなマウンドさばきで注目を集めた北海(北海道)の大西健斗投手。慶應大学野球部に進んだ大西投手は今春、神宮デビューを飾りました。

第2章では、「甲子園史上最も壮絶な試合」と言われる2006年夏の帝京(東京)対智辯和歌山(和歌山)の試合で重要な役割を果たした杉谷拳士選手(現北海道日本ハムファイターズ)に話を聞きました。いきなり味わった「天国と地獄」――彼以上に激しい夏を体験した一年生はほかにいないかもしれません。

第3章の糸原健斗選手(現阪神タイガース)は2010年春のセンバツで、21世紀枠で出場した高校に敗れたあとに「末代までの恥」と発言した野々村直通元監督(開星・島根)の

教え子です。あの試合で勝利をつかめなかった糸原選手は何を思ったのか。彼は明治大学で「人間力」を身につけ、ＪＸ-ＥＮＥＯＳを経て、阪神タイガースに入団しました。

第４章は、サヨナラボークによって最後の夏に敗れた宇部商業(山口)の上本達之(うえもとたつゆき)捕手(現埼玉西武ライオンズ)に劇的な幕切れの「真実」について語ってもらいました。上本捕手は「松坂世代」のひとり。いまだから語れることがあります。

第５章の澤井芳信(さわいよしのぶ)さんは、松坂投手が伝説をつくった１９９８年の夏の甲子園決勝で横浜と対戦した京都成章(京都)のトップバッター。現在は、シカゴ・カブスに所属する上原浩治投手などのマネジメント会社の代表取締役をつとめています。ノーヒットノーランを食らったあの夏から19年、彼はどんな人生を歩んできたのでしょうか。

第６章は、現役時代に「ピッカリ投法」で人気を集めた佐野慈紀(さのしげき)さん。彼の高校時代の雄姿をどれだけの人が覚えているでしょうか。１９８６年の夏、決勝で天理(奈良)をギリギリまで追い詰めた松山商業の控え投手でした。しかし、最後の試合に出られなかったことが、彼の人生を大きく変えることになりました。プロ野球で「中継ぎ投手として初の１億円プレイヤー」になれたのは、あの悔しさがあったからです。

第7章には「レジェンド」荒木大輔さんにご登場いただきます。五度甲子園に出場し五度とも敗戦投手になりましたが、その戦いは30年以上のときがすぎても色あせることはありません。最後の夏に「高校3年間のすべて」を粉砕されたことが、プロ野球選手として次のステージで戦うパワーになりました。

第8章のなきぼくろさんはＰＬ学園で甲子園出場を果たしたあと、グラブもバットも置き、絵の道に進みました。現在はマンガ家として『バトルスタディーズ』(講談社・週刊「モーニング」)を描いています。ＰＬ学園でのあの苦しい3年間がなければこの作品は生まれなかったことでしょう。

ある人は満員の大観衆が見守るなかで「それまでの野球観が打ち砕かれた」ほどの滅多打ちをくらいました。ある人は決勝戦で「怪物」にノーヒットノーランを許してしまいました。

自らのミスがサヨナラ負けを招いた選手も、たった一球で敗戦投手になった選手もいます。

甲子園は、遊び半分で出られるようなところではありません。高校生活のすべてをかけて野球に打ち込んだ人だけが入ることを許された場所。そこで敗れた8人の「甲子園の敗者」たちは、どのようにして涙を力に変えたのでしょうか。

それぞれの歩みをじっくり追いかけていきましょう。

目　次

はじめに

第1章　甲子園で野球のすばらしさに気づいた準優勝投手　大西健斗……1

第2章　「甲子園史上最も壮絶な試合」の一年生ショート　杉谷拳士……35

第3章　「末代までの恥」からのリベンジ　糸原健斗……59

第4章　史上唯一の「サヨナラボーク」の責任　上本達之……73

第5章　怪物・松坂が覚醒したあの夏の敗者　澤井芳信……95
第6章　準優勝した名門の控え投手を変えた日　佐野慈紀……129
第7章　甲子園のアイドルを打ち砕いた惨敗　荒木大輔……161
第8章　人生で大切なことはPL学園が教えてくれた　なきぼくろ……197
おわりに……225

第1章

甲子園で野球のすばらしさに気づいた準優勝投手

大西健斗

優勝候補に挙がっていないのに、甲子園で一戦一戦勝ち上がるたびに強くなるチームがあります。試合ごとにヒーローが生まれ、チームの結束がますます固くなる。苦しい場面で劣勢を挽回する奇跡的な一打が飛び出し、注目を集めることになります。

高校野球がファンを引きつけるのは、甲子園で成長する球児の姿が見られるから。２０１６年夏の決勝戦でマウンドに上がったふたりのエースは、甲子園で大変身を遂げる球児の代表とも言える存在でした。

ひとりは作新学院(栃木)の背番号1を背負った今井達也投手。前年夏の大会はベンチ入りメンバーから漏れ、甲子園の土を踏むことができませんでした。秋の栃木県大会は準決勝で敗退、春の県大会は背番号18でベンチ入りしたものの、登板機会はなく、夏まではエースではありませんでした。

ところが、夏の県大会には主戦投手として、チームの6年連続優勝に貢献。夏の甲子園では初戦の尽誠学園(香川)戦から決勝戦までマウンドに立ち、41回を投げて奪三振は44個、

自責点はわずか5点、防御率1・10という成績を残しました。最速152キロのストレートとカットボールを駆使して母校を54年ぶりの日本一に導いたのです。U-18アジア選手権では日本代表のエースとして活躍。秋のドラフト会議では埼玉西武ライオンズから1位指名を受けました。

決勝戦で作新学院に敗れた北海(北海道)のエース・大西健斗投手も1試合ごとに力をつけていきました。初戦の松山聖陵(愛媛)戦のあとは、「右腕がしびれて握力(あくりょく)もない」状態で、シャワーも使えず、左手で体を洗っていたほど。それでもコントロール重視で打者を抑えていきました。

松山聖陵戦では9回を4安打完投。3回戦の日南学園(宮崎)には4対1で勝利、準々決勝では聖光学院(福島)を7対3、準決勝では秀岳館(しゅうがくかん)(熊本)を4対3で破りました。決勝では作新学院に1対7で敗れましたが、39回を投げて、自責点は11、防御率は2・54という成績を残しました。

決勝では4回に作新学院打線につかまりレフトに退きましたが、そこで大きな発見をすることになりました。

自分たちのことを「最低で最高のチーム」と称した北海のキャプテン、大西健斗投手は1901年創部の古豪のユニフォームを着て最後の夏に何を思ったのでしょうか。新チームになってからの「地獄の1年間」で何を得たのでしょうか。

一死もとれずに降板……悔しさだけが残った甲子園

さわやかなマウンドさばきとアイドルに似たルックスで話題を集めた大西投手は、作新学院の今井投手がスタンドから声援を送った2015年の夏、はじめて聖地に立ちました。

「先輩たちがすごく強くて、甲子園に連れていってもらった感じでした。甲子園では他校の選手の体の大きさ、分厚さに圧倒されました。開会式の時点で圧倒されてしまって……優勝した東海大相模(神奈川)や仙台育英(宮城)の選手が近くにいたのですが、お尻まわりがデカくて、「すごい」と思いました」

当時の大西投手は身長こそ180センチあるものの、体重は60キロそこそこ。まだまだ線が細く、全国レベルで戦える投手ではありませんでした。1回戦の鹿児島実業(鹿児島)

戦に三番手で登板し、2安打1四球でワンアウトもとれずに降板。

「開会式直後の試合で、なんかふわふわして落ち着かない。前のピッチャーが打たれて僕に登板機会が回ってきましたが、どんなボールを投げたかさえ覚えていません。ひとつもアウトをとれませんでした。だから、甲子園は怖いところで、もう行きたくない、ここで投げるのは自分にはまだ早いと思いました。僕にとっては、消してしまいたい過去です。悔しさだけが残りました」

試合は4対18で惨敗。古豪は大会初日に姿を消すことになりました。

「いくつかの課題を持って、北海道に戻りました。体重が軽すぎる、変化球もストレートも質が悪い。本格的にピッチャーを始めてまだ1年くらいだったのですが、イチから投げ方をつくり直す必要がある、根本的に変わらなければと感じました」

まさかの主将指名に困惑。「どうして、オレが?」

新チーム初日の練習で、全員でグラウンドを走っているときに大西投手は平川敦監督に

声をかけられました。

「どうして、うしろのほうで走っているんだ。おまえがキャプテンなんだから、しっかりしろ」

そのとき、キャプテンに指名されたことを知りました。創部100年をゆうに超える古豪の主将の責任は重い。自分でリーダータイプではないと思っていただけに驚きました。

「ほかの選手たちは「大西だろう」と思っていたかもしれません。でも、自分ではあまりキャプテンというイメージがなくて、「えっ、オレなの?」という感じ。ほかの選手に「ああしろ、こうしろ」とは言いたくないし、自分の練習に集中したかったので、「まさか、キャプテンか」と思いました」

不思議に思った大西投手は、すぐに監督に質問をしました。「どうして、僕なんですか」と。

「試合の経験が一番あること。実戦での勝ち方を知っていて、野球をわかっているからというのが答えでした。それをみんなで共有してくれとも言われました」

一年生から主力選手として活躍していた大西投手に監督が白羽の矢を立てるのは当然で

しょう。甲子園での苦い経験を生かしてくれるという期待もあったはずです。

しかし、大西投手は困惑するばかりでした。

「そうかもしれないけど、「キャプテンか……」という感じでした。自分と人とではキャパシティも考えも違うし、掛け合わせるのは難しいんじゃないかと感じていました。自分でイメージ通りの練習をして結果を残してきたタイプなので、何かを他人と共有するとか、思いを伝えることは得意ではありません。はじめのころはとくに、一日中、一緒に練習しているのに、仲間に自分の思いや言いたいことをうまく伝えることができませんでした。

前年のチームには上級生と下級生の間に壁があって、チームとしてのまとまりはあまりよくありませんでした。仲が悪いわけではなかったのですが、下級生が上級生に何かを言える雰囲気ではありませんでした。僕の理想としている雰囲気ではなかったので、キャプテンとして、そこを変えていければと考えました」

伝統校には伝統校のよさがあり、難しさもあります。上級生と下級生との関係をどう構築するかは永遠の課題かもしれません。

地区大会初戦敗退は29年ぶりの屈辱

大西投手は甲子園での屈辱を胸に、キャプテンとしての不安も抱えながら、新しいスタートを切りました。1回戦で大敗したとはいえ、夏の優勝チームですから、当然周囲の期待は大きい。夏春連続の甲子園出場を誰もが求めていました。

ところが、センバツの出場権がかかる秋季大会は札幌地区予選でまさかの初戦敗退。甲子園出場の希望はあっさりと潰えてしまいました。北海が札幌地区予選で初戦に負けたのは29年ぶりのことでした。

「秋の大会前は、どう振る舞っていいのかわからないまま、チームを引っ張ろうとがむしゃらにやりました。ランニングのときには先頭を走り、大きな声を出してほかの選手に厳しいことを言ったりしました。だけど、秋の大会は僕が登板して6点取られ、打線も全然打てなくて完敗を喫してしまいました。ベンチに入れなかったメンバーがスタンドで応援する姿を見ても、あまり熱が入っていない感じで、「これは、ダメだな……」と思いました」

新チーム発足から1カ月、この時点で甲子園に出られるチャンスはあと1回だけになりました。残りの時間をどう使うかによって、最後の夏に得られる成果は違ってきます。

キャプテンとしてチームをどのようにまとめるのか。

どうすれば、全国で勝てるチームになれるのか。

大西キャプテンの課題は抱えきれないほどたくさんありました。大西投手と北海の選手たちの「地獄の1年間」の始まりでした。

「ここからの1年、正確には11カ月ほどが本当に長かったですね。大会に負けたあと、1週間か2週間はボールにもバットにも触りませんでした。ランニング中心のメニューの合間に自分たちでミーティングをして、グラウンドの清掃をして、監督に怒られて……「何やってるんだろうな、オレ」と思っていました」

監督からはキャプテンとしての行動を厳しく指導されました。

「自分の練習だけやって、周囲に気を配っていない。ほかの選手とのコミュニケーションがよくない。チーム全体の仕事がわかっていない。そんなことを言われました。僕は一年生の秋から試合に出させてもらっているので、裏方の仕事は全然わかっていませんでし

た。でも、監督には「キャプテンが率先して仕事をして、全体がうまく回るように考えろ」と言われました。それまでそういう経験がなかったので、ものすごく遠回りしたあげく、見当違いのことをしたこともあります」

腰を痛めて戦線離脱、キャプテンから外された

チームにはレギュラーもいれば、補欠もいます。所帯の大きい野球部になれば、仕事も役割もたくさんあります。ずっとベンチに入っていた大西投手にとってはわからないことだらけでした。そのうちに腰のケガをしてしまい、練習をすることができなくなってしまいました。

「10月ころに腰を痛めて、ほかの選手と同じ練習ができなくなって……それでもキャプテンなので声出しをしたり、裏方の仕事をしたりしていたのですが、選手たちはケガ人の言葉なんか聞いてくれません。「きつい練習もしてないくせに、何言ってんだよ」という感じで、ほかの選手との距離が遠くなってしまいました。グラウンドの外でも疎外感を覚